



ピッポ新聞

2002

9

No.167

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL&FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp/>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

ピッポ古書クラブ開店一年

ぼくが子どもの本専門の古書店をネット上に開いた理由の一つに、品切れや絶版になった良い本を再び子どもに手渡したい、ということがありました。本が既存の流通過程から消えていく(品切れや絶版になる)最大の理由は、その本が売れないからです。しかし、本の良否は、売れ行きとは別のことだと思います。

本にも人間のように、ある意味で運、不運があるのではないかと思ったりもいたします。たまにたま映画化されたとか、メディアに取り上げられたという理由で注目を浴び、そのことを切っ掛けに、売れるというようなことが良くあるものです。ブームにのることですね。

こうなると本屋はその本の仕入に躍起になり、取り次ぎや版元は居丈だけになります。大書店にはその本はうずたかく積まれ(版元や取り次ぎは大書店に売れ筋を優先的に回すのです。こういう不公平がまかり通っているのが本屋の業界です)、弱小書店の店主(特に首都圏)は、朝早くから取り次ぎの店売に並びそのおこぼれを得ようとしています。(取り次ぎでは、毎朝ベストセラー本を一店3冊などという制限を設けて分けるのですが、ぼくはこういうのを取り次ぎ会社の不遜だと思つたのです)

一方地方の小書店はどうするかといえば、ブーム期間中お客さんがその本を買いに来るわけですから、それを版元へ注文します。しかし、売

れている期間中は、その本はほとんど入荷してこないのです。頭にくるから、注文をさらに出し続けるわけですね。それでも売れている期間中は入荷しないのです。ところが突然その本がドット入荷し始めるのです。このことは何を物語るかと言えば、その本のブームはもう終わりましたということなのです。もう店に置いてあってもお客さんは見向きもしません。

こんなベストセラーを追っかけるなんてのは、ぼくの性には絶対に合いませんし、そんな本など一冊たりとも売りたいとも思いません。しかも、こういうのは、必ず一時的な現象で終わるのです。25年間子どもの本屋をやってきて、幸いなことに(不幸なことかもしれないが)子どもの本は、めったにブームになることは有りませんでした。しかし、たまには、それらしいことは何度かはありました。

ちよつと面白かったのは、「ウォーリーをさがせ」という本が売れていたときのことです。この本の版元の営業マン氏が店に来て、得意気に開口一番「ピッポさん何冊いりますか」といったのです。ぼくは別に「ウォーリー」など売れても売れなくてもどうでもいいと考えていたものですから、店には置いてありませんでした。

しかし、くだんの営業マン氏は、当然ぼくが「ウォーリー」を欲しがるものとして来店しているわけですから、その言い方にカチンときたものですよ、「といったものですから、営業マン氏はピッポリして帰ってしまい、それ以来、今日まで店には現れません。

これとは逆な立場の本もあります。本屋としてどうしても置きたくて置いてある本と言ひ換えたら分かりやすいかもしれません。ピツポの本の多くはそんな本で占められています。

つい最近ブームになった『指輪物語』だつてそんな本の一冊でした。この本はピツポの棚には、もう20年も前から単行本と文庫本が揃えて置いてあります。ファンタジー好きな(中学生、大人)人にオヤジが勧めてきた本なのですね。

それは何よりも「おもしろい！」作品だからです。ブームとは関係なくピツポでは売り続けたい本だったのです。たとえそれが一年に2、3セットしか売れなくてもね。

こういふ話しになると、日頃の恨み辛みが一気に浮上ってきて、筆がついつい走ってしまふものですね。最初に戻ります。

ぼくは古書の世界で、品切れや絶版になつた本の中で、ぼく自身が「これだ！」という本を発見・発掘したいと思つているわけです。

勿論、商売として始めたわけですから、お客さんが探している本を見つけたというのも仕事の一つです。その探している本を見つけて、手渡すことができればこちらもうれしいのです。

リニューアルしたピツポのホームページには探求書というコーナーを設けたのですが、自分の探している本を、このコーナーへ登録してくれるお客さんが、このところ急増しています。

ところが、古本屋のオヤジとしては新米ですから、お客さんの探している本がどんな本かを(自分がかつて読んだことがあつたりして)知っていても、それを探し出す勘所がまだつかめません。

時には、貴方、この本探してるの「なるほど、分かるナー」なんて、コンピュータの向こうの人に相づちを打ちなくなるよな本をお捜しの人もいます。

そこで最近では古本屋を見て歩く回数がとても増えました。デパートなどでやる古本市にも良く出かけます。ところが、子どもの本はどの古本屋にも余り置いてありません。

だからこそぼくは古本屋を始めたわけですがね。

それでもたまに「あつ、こんな本があつた」と、予期せぬ発見をすることがあります。そういう本は即購入します。そして、一人で悦に入っているのですね。これはもう、古本屋のオヤジというよりも、古本マニアの心境なのかもしれません。学生時代のように、神田や早稲田の古本屋を回つて歩くことが多くなりました。子どもの本ばかりを見て歩くわけではありませんがね。大した用もないのに、東京へ出かけていくわけですから、カミさんの渋い顔ったらありやしません。

それでも、出かけていって、古本をたくさん買うことができれば、まだよいのです。買いたいと思う本はあまり発見・発掘できません。マア、ぼくは古本屋のオヤジとしての修行期間だと思つているのですが

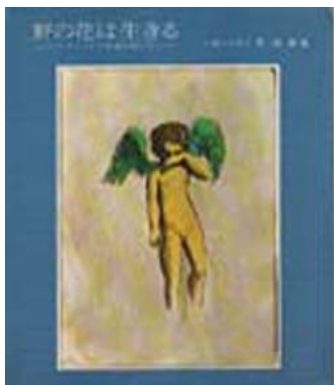
ね。カミさんはなかなかこのことを理解してくれないのです。

ところで、8月の初め新宿伊勢丹の古本市で一冊の本を手に入れました。『野の花は生きる』という本をです。これはいぬいとみさんの書いた本で、司修さんが、挿し絵を描いています。副題が

「リディツエと広島の花たち」
とありました。ぼくは恥ずかしながら、この本の存在をそれまで知りませんでした。司さんの表紙絵に惹かれたということもありですが、副題の「リディツエと広島の花たち」が、とても気になったのです。

購入して、帰りの新幹線の中で読みました。読後に、この本は若い人たちに伝えていきたい本の一冊だと強く思うよになったのです。

この『野の花は生きる』は童心社から1972年に発行されたものですが、帰つてから調べてみたら、品切れ中で現在本屋には流通していないことがわかりました。



リディツエはチェコスロバキアにあった小さな村の名前です。この村は1942年6月10日の夜、突如侵入してきたドイツ軍によって、見せしめのため14歳以上の男たち

はすべて銃殺され、女と子どもたちは村から連れ去られ、村は焼き払われてしまったのです。

いぬいさんは、このことを広島や沖縄、当時まだ終わっていないかったヴェトナム戦争を視野に入れながら、戦争の愚かしさを、そして、直接手を染めなくても知らないということが加害の立場に身を置くことになことを訴えています。

この本は若い人たちに是非引き継いでいきたい本だと思いました。

今や時代は、「この国の首相が傲然と「備えあれば憂いなし」などと言って、戦争準備法(有事立法)をこの秋の臨時国会で再び通過させようとしているところまで進んでしまっています。反テロと叫べば、戦争準備を許してしまうほどに、我々の反戦への思いは薄れてしまったのでしょうか？

最近では中学生にも読み聞かせが流行っているようですが、どうせ読み聞かせるのであれば、ぼくはこの『野の花は生きる』をお薦めしたいな。この本だったら、まだ学校の図書館や市立図書館にはあると思います。

さて、お手元にある子ども本で子どもや若者にどうしても手渡したいとお考えの本が有りましたら、ピッポへお持ち下さい。ピッポはそれをお引き受けいたします。

さて、ぼくのオンライン古書店「ピッポ古書クラブ」は、開店したのが、去年の十月でした。今月で満一年になります。

ますますおじさんは、古書の世界にのめり込んでいきそうです。

徒然なるままにおじさんの春夏秋冬

白馬登山、最後
がちよっとね

ぼくは山へ行く場合は、込み合う時期をちょっと外して出かけることが多いのです。例えば、5月連休の終わり頃とか、お盆過ぎと言つ具合です。これだと、期間中込み合った乗り物も、山小屋も驚くほど空いています。今回もそのつもりで、8月22日に白馬岳に出かけました。

夜行で、23日朝白馬駅に降り立った登山者は意外に大勢でした。猿倉行きバス停には50人近くの人々が並びました。バスの時刻表をのぞくと、1番のバスでなくても、30分後にも猿倉行きが出るのが分かりました。ぼくは後のバスにすることにして、駅に戻り、トイレと洗面を済ませ、朝食用に昨晚新宿で買ったパンを食べました。それから、バス停に戻ると、登山客はもう誰もいませんでした。結局2番のバスに乗ったのは、ぼくともう一人の二人だけだったのです。ちよっと外すというのはこういうことをぼくは言うのです。

大雪溪も順調で、白馬山荘に着いたのが午前11時前、約4時間でここまで来てしまいました。早く登るのは決してほめられたことではないが、今日は体調も良く無理なく登れたのがなんだかうれしくて。特筆すべきは、このところの山行では後から登ってきた人に抜かれることが常でしたが、今日は、いくつものパーティーを追い抜いてきました。理由は色々あるのです。背中のザックが夏の小屋泊まりのため軽かったため・冬や春の雪山と違って、登山者があまり山慣れていない人が多いため・ここはちょっと強調したいのですが、この3ヶ月週一回1時間ほどジョギングを続けたこと。(人によっては週一回のジョギングなど何の役も立たないと言いますが)

それでね、ここまでは順調だったのです。ここまではね。正確には下山口の蓮華温泉までは、何事もなく気分の良い山行だったのです。温泉にも浸かって、鼻歌が出るほど気分も良かったのです。まあー下山中は雨と霧で景色は余り見ることはできなかったのですがね。そんなの気にしない気にしない。

10時半の岩立行きのバスに乗る予定で、バス停でザックに腰掛けて文庫本を読みながら待っていたのです。気分良くね。しかし、予定の時間になってもバスは来ません。「田舎のバス」だから遅れることなど普通なのだと思うことにしました。20分が過ぎました。バスは来ません。疑問が少し頭をよぎりました。「田舎のバス」だからと思うことにしました。40分が経ちました。もう文庫本など頭に入ってきたせん。念のために、もう一度バスの時刻を確認することにしました。間違なく10時30分発です。「おかしいな?」さらによく見ると、ぼくの10時30分を含めた幾つかの時刻の所に、丸い黒点が打つてあるのを発見しました。そして、何と!黒点は8月19日までの運行と但し書きがあるではありませんか。そして、今日は24日です。

「田舎のバス」は遅れるのが普通のことではなく、運行されていなかったのです。次のバスが来るのは16時となっていました。ぼくの乗る汽車は南小谷を14時50分発なのです。間に合いません。仕方なく温泉口ツジへ戻りタクシーを呼んでもらいました。待つこと1時間半タクシーは来ました。料金は南小谷駅まで1万3千円近くも掛かってしまいました。さっきまでの鼻歌交じりの気分はすっ飛んでいました。あーあーついてないな!

秋の森へ行こう！

木の実とキノコの本ミニ特集

秋はいいね。森へ行けば木の実やキノコがいっぱいあるよ。きみの拾った木の実は何の実かわかるかな？ピツポでは木の実やキノコの本を集めてミニフェアを開催しています

『くるみ』（かがくのとも10月号 松岡達英・作 410円 福音館書店）

『こならぼうやのぼうし』（ちいさなかぐのとも10月号 八百板洋子・文 高森登志夫・絵 福音館書店）

『木の実とともだち』（松岡達英・構成 下田智子・絵と文 1575円 偕成社）

『どんぐりノート』（いわさきゆうこ・大滝玲子・作 1325円 文化出版局）

『紅葉と落ち葉』（平野隆久・写真 片桐啓子・文 1680円 山と溪谷社）

『たねのずかん』（高森登志夫・絵 古矢一穂・文 1365円 福音館書店）

『森のきのこ』（小林路子・作 1470円 岩崎書店）

『きのこはともだち』（構成・松岡達英・構成 下田智美・絵と文 1575円 偕成社）

『ドングリと松ぼっくり』（平野隆久・写真 片桐啓子・文 1680円 山と溪谷社）

そして秋の絵本も

『にぐるまひいて』（Donald・ホール・文 バーバラ・クーパー・絵 もきかずこ・訳 1470円 ほるぷ出版）

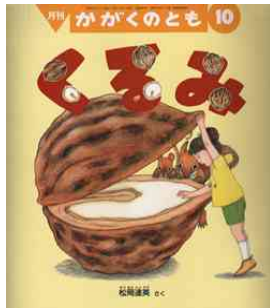
『サリーのこけももつみ』（マックロスキー・作 石井桃子・訳 1785円 岩波書店）

『秋は林をぬけて』（小泉るみ子・作 1365円 ポプラ社）

『きんいろのあらし』（カズコ・G・ストーン・作 840円 福音館書店）

『あきいろおさんぼ』（村上康成・作 1260円 ひかりのくに）

『14ひきのやまいも』（いわむらかずお・作 1260円 童心社）



インフォメーション

「ばあやのお話かご」今月はお休み9月28日に予定していた「お話かご」は宮崎さんのご都合で、お休みさせていただきます。次回は10月26日（土）午後2時から開催いたします。どうぞお出でください。

復刊のお知らせ

『きんいろのしかーバングラディッシュの昔話』（石井桃子・再話 秋野不矩・絵 1260円 福音館書店）

バングラディッシュ国交30年を記念して復刊『てんにのぼったなまず』（たじまゆきひこ・作 1260円 福音館書店）

老人の描いたナマズの絵が豪雨を呼び、村の塩書を救う話。

編集後記

昨日の朝（8日）有度山へカミさんとクリ拾いに行った。まだ早かったのか、クリは木から落ちていなかった。ところで、「ここは県有地です。無断で入らないでください」という立て札があちこちで目に付いた。おいおい書いてある文句が間違っているでしょう。「ここは県有地です。県民のみなさんどうぞ自由に自然と親しんでください」これが本当でしょう。長野県の田中知事のように、「県民に奉仕するために」と自ら公僕であることを自覚していれば、「無断で入るな」などという無礼なことは書かないだろう。君らは市民に奉仕するための存在なのだ！